

東京都豊島区立千川中学校

豊島区立千川中学校の遠藤純子先生は、昨年、担任のクラスで「生命の尊重」をテーマに道徳の授業を行った。生徒には、事前学習として祖父母への聞き取り調査を課した。祖父母の子ども時代の様子や時代背景、子育てへの思いなどを聞くという、自分のルーツをたどる内容だ。

調査結果は生徒個々で「デジタル紙芝居」にまとめた。学習ボランティアが用意した

プレゼンテーションソフトのフレームに必要な情報を書き込み、スライドショーにするもので、生徒は1人1台のタブレットPCを使い、読みやすい文字量、内容にふさわしい書体や色を選び、時にはイラストや写真を入れて表現していった。作成したデジタル紙芝居は、班内で発表して感想を述べ合い、友だちの受け継がれてきた命も感じる場を設けた。その上で、道徳の副読本

を読み、遠藤先生が自身の体験談を語った。生命の神秘について問い掛けると、生徒からは「その歩みが未来の自分をつくっていくのだと感じた」など、授業テーマの本質を突くような意見が次々と上がった。

「この授業では、21世紀型スキル（*）の中の『コミュニケーション』『情報リテラシー』『個人と社会における責任』などの育成をねらいとしました。デジタル紙芝居の発表によって活発なコミュニケーションが生まれ、驚いたことに不登校気味の生徒も授業に積極的に参加していました」

学力に関係なくICTで創造力を発揮

千川中学校は、2011年度に「ICTを活用して子どもたちの21世紀型スキルを育成する実証・研究事業」の指定を受けた。これは、東京大、日本マイクロソフト（株）、レノボ・ジャパン（株）、豊島区教育委員会の共同研究事業で、同校にはタブレットPC40台、Microsoft Office[®]、無線LAN、ICT支援員などの環境が整備され、これらを活用しつつ21世紀型スキルを育成するという研究に取り組んだ。小林豊茂校長は事業参加のねらいを次のように語る。

「21世紀型スキルはこれからの日本を担う生徒に必要な力です。未来を生き抜く力を生徒に育みたいと思うと同時に、授業で自由にICTを使える環境を整えて、先生

21世紀型スキル育成に タブレットPCを活用

2011年4月、文部科学省が公表した「教育の情報化ビジョン」では、

2020年度に向けて実施する施策の1つに

子ども1人1台の情報端末による教育を

本格展開させることの検討を挙げた。

ICTの活用で、どのような指導が可能となるのか。

2年前に1人1台のタブレットPCなど

ICT環境を整備した学校の取り組みから考える。

School Data



東京都豊島区立千川中学校

◎ 1947（昭和22）年開校。21世紀型スキルの育成を図る実証研究に実践校として参加し、デジタルを活用した教育活動を推進している。

校長 小林豊茂先生／生徒数 263人／学級数 10学級（うち通級指導学級2）／所在地 〒171-0042 東京都豊島区高松1-9-21／TEL 03-3956-8171 URL http://toshima.schoolweb.ne.jp/senkawa_j/

*世界の教育関係者が立ち上げた国際団体「ATC21s」が提唱する概念で、グローバル社会を生き抜くために必要な力を指す。4つのカテゴリーに分けられた10項目から成り、創造力とイノベーション、コミュニケーション、情報リテラシー、個人と社会における責任などがある



豊島区立千川中学校校長

小林豊茂

こばやし・とよしげ 「生徒の将来を見据え、教育実践と研鑽に励みたい」



豊島区立千川中学校

林謙太郎

はやし・けんたろう 3 学年担任。数学科。「生徒の探求心や創造性を伸ばす支援をしたい」



豊島区立千川中学校

遠藤純子

えんどう・じゅんこ 教務主任。理科。「生徒の行動や気持ちをありのままに受け入れる」



写真 理科の実験で、班ごとにタブレットPCを利用。お互いの考えを出し合いながら、実験結果の予想や結果を比較することを通して、協調的な問題解決力の育成を目指す

方の授業力をより高めたいと考えました」

ICT環境が整備されたからといって、いきなり全授業で最初から最後までICTを使うような授業が行われるようになったわけではない。自分の意見をタブレットPCに書き、それをグループで見ながら話し合ったり、理科の実験の様子をデジタルカメラで撮影して、考察に生かしたりと、ICTは指導の内容に応じてスポット的に活用する。それでも、1人1台のタブレットPCが使えることで生徒の集中力が増すと、3学年担任の林謙太郎先生は評価する。

「円を使った数学の問題を作成する授業を行いました。問題作りの条件は、自分が解けることと他の生徒に解説できることです。『創造力とイノベーション』や『情報リテラシー』などの育成がねらいでした。生徒は数学の問題作りに苦労していました。意欲的に取り組んでいました」

「創造力とイノベーション」の育成は、

授業だけではなく特別活動でも行われている。現3年生は、昨年、尾瀬移動教室の事前・事後学習で、後輩が活用できるようにと尾瀬に関するデジタル教材をグループで作成した。今年は、京都・奈良の修学旅行に行く前に、1人ずつ京都・奈良の名所を分担し、インターネットで調べ、各2ページでまとめた案内冊子を作成した。

「今年の冊子を見ると、去年のデジタル教材よりも、創造力や表現力が数段階レベルアップしています。配色や書体、色などを工夫して表現しており、どのページをとっても同じものがありません」(林先生)

1年生の頃は教師が示した見本と似たような表現をしていた生徒たちだが、タブレットPCの操作法を覚え、友だちの作品を見るうちに、徐々に創造力が高まり、個性豊かな作品を作るようになっていった。

「手書きでは文字や絵の上手・下手が目瞭然です。ICTを使えばそのことを気にせずに自由に表現できるので、生徒は作成に没頭できるようです。良い作品が必ずしも学力の高い生徒のものとは限りません。学力にかかわらず、創造力が伸びるのを実感しています」(小林校長)

ICTによって指導の幅が広がった

今回の共同研究事業によって、教師の指

導の幅も広がったと、林先生は言う。

「以前は、授業に生徒一人ひとりがパソコンを使う場面を入れたらと思うたら、パソコン教室で授業をせねばならず、他クラスとの兼ね合いもあり、制約がありました。それが今は、普通教室でも1人1台のタブレットPCを使えるようになり、指導ツールの1つとして選択肢に入れています」

だからといって、授業そのものが大きく変わったわけではない。教師もさることながら、生徒のICTスキルもばらばらだ。そこで、クラスの中でもパソコンが得意な生徒数人を学習係に任命し、その生徒が班内のICTに関する教師役となりながら活動を進めている。

「学習目標に到達するために、目の前の生徒にとって最も効果的な手法を取るという授業の根本は同じです。黒板に大型テレビ、タブレットPC、パソコン教室など、どの場面で何を使うと効果的なのか。選択肢が増えたからこそ、教師には授業の工夫がより求められるのではないのでしょうか」(遠藤先生)

子どもが、ICTを活用して21世紀を生き抜く力を身に付ける。そのために、教師にとって必要なのは、ICTをうまく生かせる指導力である——ICTに詳しい教師が決して多くない同校が研究を進めてきた成果が、その重要性を示している。